様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２４１４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７０６８２

研究課題名（和文）大学生による学校支援ボランティアに関する研究

研究課題名（英文）University students' volunteer for elementary school support

研究代表者
杉本　希映（Sugimoto, Kie）

目白大学・人間学部・准教授

研究者番号：９０５０８０４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現在の教員・児童生徒を取り巻く諸問題における対応策の１つとして、大学生による学校支援ボランティアの可能性を検討したものである。研究者らは、所属する大学において、大学生を学校支援ボランティアとして小学校に派遣する実践を継続している。その実践を基に、ボランティア活動を体験したことによる学生の変化の検討、ボランティア学生を活用した学校側の変化の検討、それら変化に関連する要因の検討を実証的に行った。そのうえで、学校と学生双方にとって有効なボランティア活動となるためのシステムとボランティア学生の教育プログラムについての提案を行った。

研究成果の概要（英文）：The study examines a possibility of school support volunteer by college students as one of the countermeasures for various issues currently surrounding the teachers/students. The researchers have been continuously sending students from their colleges to elementary schools as school volunteers. Based on such practice, the study has empirically examined changes in college students through the volunteer experience, changes in elementary school with use of college volunteer students, and factors in relation to those changes.
With the consideration of the results, the researcher made a proposal for both school and student as a system of effective volunteer activities and an education program of volunteer students.

研究分野：教育臨床学

キーワード：学校支援ボランティア　大学生　サポートシステム

１．研究開始当初の背景

文部科学省の「教員のメンタルヘルスの現状」によると，教員の休職者数は，年々増加の一途をたどり，そのうち精神疾患による割合は 6 割を超え，教員全体に占める割合は 0.6%と平成 22 年度現在では 10 年前の 3 倍となっている。教員の疲労度の認知は一般企業の労働者よりも強く，特に「仕事の質と量」においてストレスを感じている教員が多いことが示されている。そのような中で，学校現場をめぐる諸問題は，注目を集めているいじめ問題を筆頭に，不登校問題もいまだ高い水準で推移，暴力行為，非行など反社会的行動は低年齢化の傾向，発達的な問題を抱え特別の配慮を必要とする子どもの増加など取り組まなければならない課題が山積している状態である。多忙感，疲労感を強く感じながらも，教員は教科指導，課外活動の指導に加えて，次々と生徒指導上の問題への対応も求められているのが現状といえる。筆者は，そのような学校現場を取り巻く問題に対して，「学校支援ボランティア」の有効な活用が 1 つの打開策につながるのではないかと考え，研究のテーマとすることとした。

２．研究の目的

本研究は，現在の教員・児童生徒を取り巻く諸問題における対応策の１つとして，大学生による学校支援ボランティアの可能性を検討するものである。学生によるボランティア活動による学生，学校双方の変化の検討，その変化に関連する要因の検討を行い，これまで実証的に検討されてこなかった大学生による学校支援ボランティアを包括的に捉えることを試みる。特に，学生ボランティアの体験プロセスを分析し，変化を支えた要因を検討することで，学校と学生双方にとって互恵性のある活動となるためのシステム構築，研修プログラムを提案していくことが，本研究の最終的な目的である。

３．研究の方法

（１）実践内容と調査対象者

①実践内容

筆者が所属する大学は 2004 年度から都内Ａ区と協定を結び，公立小・中学校に心理カウンセリング学科の学部生および臨床心理学専攻の大学院生を「メンタルサポート・ボランティア」として派遣し，各学校のニーズに応じて，児童・生徒の教室内外での心理的支援を提供する活動システムを実践している。筆者は，2012 年度から現在まで，この活動の大学側の責任者として担当している。大学生は，週１回１年間のボランティア活動を継続するとともに，大学における授業を通年で受講する。授業は，筆者を始め臨床心理士の資格を持ち学校での臨床経験のある大学教員（以下，小学校における教員と区別するため大学教員と表記）4 名が担当している。小学校での活動内容は，教室に入り学習や生活上で特別のニーズを持つ特定の児童生徒への支援が多い。学習指導補助は，教科内容の指導そのものよりも，児童とともに過ごすことを通して信頼関係を作り，その心理的安定を図ることを主な目的としている。週１回の大学における授業では，活動にあたっての基礎的な知識を学び，徐々に実践で必要なスキルのロールプレイ，学生同士が支えあうグループシェアなど状況に応じて実施している。その他にも緊急時の個別指導や面接を必要に応じて大学教員が行うなど，学生ボランティアの活動を把握することで１年間の活動をサポートするシステムを整えている。

②調査対象者

本研究における調査対象者は，ボランティア活動に参加した学生，ならびに活用した学校（管理職と学生を活用した教員）である。

（２）調査時期・方法

①アンケート調査

2012 年～2015 年まで，学生と学校双方に活動の開始前と開始後に無記名式のアンケート調査を実施し，ボランティア活動による変化，困難感についての分析を行った。

②インタビュー調査

2014 年・2015 年度にボランティア活動に参加した大学生 13 名。半構造化面接を実施し，修正版グラウンデッド・セオリーを用いて体験プロセスの分析を行った。

４．研究成果

（1）ボランティア活動に対する困難感の検討

①「ボランティア活動に対する困難感」の因子分析結果

活動前のデータのみを使用して因子分析を行った結果（主因子法・プロマックス回転），「Ⅰ個人的な関わり欲求への対応(α=.91)」「Ⅱネガティブな事象への対応(α=.85)」「Ⅲ活動への期待と現実の差異(α=.79)」の 3 因子が得られた。

②「ボランティア活動に対する困難感」の活動前後における t 検定の結果

「困難感」の 3 つの下位尺度について活動前後で対応のある t 検定を行ったところ，すべてにおいて有意差は認められなかった。そこで「困難感」についての項目ごとに活動の前後で対応のある t 検定を行ったところ,「子どもがもめごとを起こした時」「子どもについての考えや意見が，先生方・他の相談員などの間で食い違って，板挟みになる時」「メンタルサポート・ボランティアの役割が十分に理解されていなかった時」「先生方の子どもへの指導や言動に対して，疑問や憤りを感じた時」の 4 項目で有意差が認められ，活動前より後の方が有意に得点が低かった。

③「ボランティア活動に対する困難感」の 3 群分けの結果

活動前後の各「困難感」の項目を，平均値±標準偏差により高・中・低の 3 群に分類した。t 検定により有意差が認められなかった

項目を見てみると前後で変化がなく，多くの項目が前後で中群であり，前後ともに低群なのが子どもから個別の関係を求められる第Ⅰ因子の項目，前後共に高群なのが自分の行動がマイナスの影響を与えたのではないかという項目であった。

以上のことより，「Ⅰ個人的な関わり欲求への対応」は，全体的に活動前から困難感が低く，活動後に有意差はないものの高まる項目があった。活動当初の学生の意識の低さがうかがえることから，活動中に問題を生じる可能性が高いともいえる。よって，活動初期にボランティアとしての子どもとの個人的な関わり（アドレスの交換など）についての知識を与える講義を行うことが有効と考える。第2因子と第3因子は，活動前から困難感は高く，活動後に上がりはしなかったもののそのままを維持している項目が多かった。授業において，「Ⅱ」については個別事例の検討会，「Ⅲ」についてはボランティアの役割の講義や教育委員会の指導主事から教員の声やニーズの話をしてもらうなどのサポートを行ったが，今後は困難感を下げるためのより具体的な方策を検討していくことが課題といえる。

（2）活動による変化についての検討

①学生の社会人基礎力についての結果

活動前と後で「社会人基礎力」を測定した結果を Wilcoxon の符号付順位和検定で比較したところ「喜びや悲しみなど，自分が感じたことを人に伝えることができる」で有意差，「相手の意見を丁寧に聞くことができる」「状況が困難でも，問題解決に向けて努力できる」で有意傾向が認められた。

②学校状況の変化についての検討

活動後に学校状況（子どもの様子，クラス全体の様子，先生の考えや行動等 25 項目）について，大学生ボランティア，管理職，ボランティアを主に活用した教員の3者にアンケート調査を行った。その結果，3 者に有意な差が認められたのは，「子どもの問題行動が促進された」，「ボランティアの指導は教師の負担であった」，「ボランティアが関わることで児童生徒への一貫した指導が難しくなった」，「ボランティアに何をさせればいいかわからなかった」という活動に対するネガティブな評価についての項目は，管理職・担当教員よりも大学生が有意に高かった。一方，「支援対象児童生徒や学級に対する指導を充実させることができた」，「学級や相談室の雰囲気が良くなった」，「教師に精神的な余裕ができた」という活動に対するポジティブな評価は，学生より活用学校の方が有意に高かった。

以上のことより，活動を体験した学生自身の変化としては，社会人基礎力における数項目が上昇したという結果であり，大きな変化とは言い難い。これは，この活動に参加する学生がもとから社会人基礎力が高いため，前後で差が生じなかったということが考えられる。よって，活動をしていない学生との比較をすることによって確認する必要が残された。学校状況の変化については，学生より活用した学校の方が活動を高く評価しているということが明らかとなった。学生の自己評価が低いということは，活動を続けるモチベーションや活動後の達成感に影響してくることと考えられるため，学生にポジティブなフィードバックをする機会をさらに増やす必要があるといえる。

（3）ボランティア活動の体験プロセスと支えた要因の検討-修正版グラウンデッドセオリー・アプローチによる分析-

①目的・方法

本実践において学生ボランティアが小学校でのボランティア活動をどのように体験しているのかを検討することによって，学生の活動を支えるシステムを考察することを目的とした。方法は，2014 年・2015 年に，首都圏内公立小学校で「メンタルサポート・ボランティア」として活動した 13 人（男性 5 人，女性 8 人）の大学生に対し，半構造化面接を実施し，データを収集し，修正版グラウンデッドセオリー・アプローチにより，そのプロセスの分析を行った。53 の概念と 9 のカテゴリーが得られた段階で，新たな概念が得られないと判断し，分析を終了した。最後に，分析結果の概要をストリーラインとして文章化し，結果図を生成した。

②結果

カテゴリーを中心に，分析により得られた大学生における 1 年間の学生支援ボランティア活動の体験プロセスの枠組みを説明する。

学生は，1 年間のボランティア活動で，《ネガティブな体験》と《ポジティブな体験》を経験する。特に活動当初は，《ネガティブな体験》が多く，それに伴い《ネガティブな感情》が喚起される。その《ネガティブな感情》を抱えながらも，《活動継続を支えた要因（授業内容以外）》と授業における[グループシェアによる仲間との共感]により，活動を辞めることなく継続していく。活動を継続する中で，《活動継続を支えた要因（授業内容）》による学びに影響されて[子どもとの関係]や[教員との関係]で《ポジティブな体験》をしていく。それに伴い，《子どものポジティブな変化》や《自分自身の変化》を感じ，《ポジティブな感情》も喚起されるようになる。しかし，活動の経過に伴い，《ネガティブな感情》がなくなり，《ポジティブな感情》に移行するわけではない。《ネガティブな体験》の中には[子ども・クラスのネガティブな変化や変化のなさ]を感じさせるような継続するものも存在し，また [授業]もすべて《ポジティブな体験》ではなく，《ネガティブな体験》となることもある。よって，《ポジティブな感情》と《ネガティブな感情》とが揺れ動き，あるいは双方を抱えながら，活動終了を向かえることとなる。このような様々なことを体験した学生は，最終的には《自分自

身の変化》をすべてポジティブなものとして捉えている。

②考察　－学生ボランティアを支えるシステムについての提言－

本研究において，大学生の小学校でのボランティア活動のプロセスを明らかにした。その結果から，学生ボランティアをサポートするためのシステムに必要な点を，受け入れる学校側と送り出す大学側から提言する。

・受け入れる学校側が提供できるサポート

第一に活動開始時に学校の教職員にボランティア学生の存在を周知させること。第二に学生にボランティア活動の目的と内容を明確に伝えること，その内容を全教員が共有すること。第三に学生と教員の情報交換の時間を設定すること。第四に教員からのボランティア学生に対する肯定的な関わりと活動に対する評価のフィードバックを行うこと。

・大学側が提供できるサポート

上述した第一の活動開始時のボランティア学生の周知という点に関しては，まず活動開始時に，学生の活動に対して理解してもらうために「メンタルサポート・ボランティア活用にあたってのご案内」という冊子を学校に配布している。また，学生の活動初日に向けて，学校との電話対応，教員への自己紹介と挨拶，忙しい教員に失礼にならない声のかけ方など，具体的な場面を想定したロールプレイを授業で実施し，学生自らが学校というコミュニティに積極的に入って行けるよう指導している。このような，大学側の細かいサポートも必要であると考える。

第二・第三の学生のボランティア活動の目的と内容の明確化と情報交換については，管理職と学生の初回の顔合わせの際に利用できる「活動開始にあたっての確認事項」という用紙を作成している。活動日程・場所，対象児童と支援を求める理由，学生に求める具体的な活動内容，連絡調整・情報交換の方法などが記入できるようになっており，学生にはこれをもとに管理職，あるいは窓口となる教員と話すように指導している。しかし，今回の結果から，役割が不明確である学生も少なからずいたことから，この点に関しては学校と学生の意識をより高めることが必要であると考える。

第四の活動に対する評価のフィードバックに関しては，授業におけるグループシェアにおいても事例検討においても，まず学生が試みたこと，できていることに目を向けるように指導している。事例検討での発表者には，メンバー全員から書いてもらったコメントを渡すようにするなど，授業の中では，活動に対する肯定的なフィードバックを受けられるよう工夫している。しかし，学生にとっては，「教員の目が気になる」というように自分が活動している学校からの評価が重要となっている。よって，学校に対しても，この点をより理解してもらう必要がある。

授業については，多くの内容が学生を支える要因となっていたが，ネガティブな側面も明らかになった。特に[他人との比較]からくるネガティブな感情や同じ学年だからこそアドバイスがし合えず不全感を持ってしまうという点は課題であるといえる。情緒的面のピア・サポートはできていると考えられるが，学び合うというピア・ラーニングの側面を強化する必要があるといえる。そのためには，ピア・ラーニングの基本的な考え方ややり方（中谷・伊藤，2013）についての講義を，授業の開始当初に導入していくことが必要だと考える。

（3）今後の課題

本研究では，ボランティア活動の厳密な効果検討はできていない。このような実践の中での効果研究は非常に困難であるが，方法論も含め検討してくことが今後の課題として残された。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①<u>杉本希映</u>，学校教育に「心理」が入ることで生まれる多様性　－大学生による学校支援ボランティア活動の報告から－　日本学校教育学会機関誌　査読無　（2016 年 8 月掲載予定）

〔学会発表〕（計５件）

①<u>杉本希映</u>，大学生によるピアサポート－小学校における学校支援ボランティアの実践－　日本教育心理学会第 57 回大会，2015.8.28，新潟コンベンションセンター（新潟県新潟市）．

②<u>杉本希映</u>・黒沢幸子・青柳宏亮・諏訪絵里子・日髙潤子・平久江薫，大学生による学校支援ボランティア経験者の困難感の検討　日本発達心理学会第 26 回大会，2015.3.21，　東京大学(東京都文京区)．

③<u>Kie Sugimoto</u>, Sachiko Kurosawa，Eriko Suwa，Kosuke Aoyagi, Kaoru Hirakue, Junko Hidaka，THE CHANGE OF VOLUNTEER STUDENTS AND THE USERS.-EVALUATIONS OF VOLUNTEERING PROGRAM IN ELEMENTARY SCHOOL IN JAPAN‐International Psychological Applications Conference and Trends, 2014. 5. 3, Best Western Premier Hotel Slon（Slovenska Cesta）.

④<u>杉本希映</u>・黒沢幸子，大学生による学校支援ボランティアについての事例検討　日本学校心理学会第 15 回大会，2013. 9.14，皇學館大学（三重県伊勢市）.

６．研究組織

(1)研究代表者

杉本　希映（SUGIMOTO，Kie）
目白大学・人間学部・准教授
研究者番号：90508045